幼年教育研究年報　第44巻　73－79
The Annual Research on Early Childhood, 2022

子どもの行動に対する親の認知が養育態度に及ぼす影響
― 母親の感情状態を媒介要因として ―

森岡まどか[1]・清水　寿代[2]

The effect of parental cognition of child behavior on parenting styles
― considering the mediation of mothers' emotional state ―

Madoka MORIOKA[1], Hisayo SHIMIZU[2]

Abstract: In recent years, child abuse has become a social problem in Japan, and it has become urgent to adopt measures to prevent it. In this study, we focused on parenting styles in order to examine the factors related to parents. We classified parenting attitudes into three categories, and investigated how the mother's cognition of the child's behavior mediates emotions, and affects parenting attitude. Results showed that the more mothers recognize that the child is responsible for his/her own troubled behavior, the more it affects the authoritarian and permissive parenting attitudes, through hostility, depression, and anxiety. The findings also suggested that the mother's cognition mediates emotions, and influences parenting attitude. Therefore, it is necessary to reconsider the scale of parenting attitude, and clarify the mechanism that influences different emotions and parenting attitude, even with the same cognition of parents.

Key words: parent's cognition, emotion to child, parenting styles

目　的

近年，虐待などの件数が増加・深刻化し，親の養育態度や養育行動が注目されている。政府は，体罰を禁止し子どもの権利を擁護する児童虐待防止対策の抜本的な強化を図るなど，事態の改善に向けて動いている（厚生労働省，2019）。その中で，虐待に関連する要因の一つとして，親の要因である養育態度がある。Akai, Guttentag, Baggett, & Noria（2008）によると，愛情表現や子どもへの応答の仕方，発達に関する知識などを教わる介入を受けた母親は，虐待リスクのある養育態度が少なくなったことを明らかにしている。このことから，虐待につながり得る養育態度に影響を与える要因の研究が必要であると考えられる。森岡（2020）では，養育態度を応答性と統制の２次元で捉え，養育態度に影響を与える要因に着目し，ソーシャルサポートが育児感情を媒介して養育態度にどのような影響を与えるのかについて検討した。この研究の追加分析では，応答性が低く統制が高い群と育児に対して抱く肯定的な感情の低さ，育児を負担に感じる感情の高さ，祖父母からの情緒的・情報的サポートの少なさにそれぞれ関連が見られ，子どもに対して情緒的に反応する応答性の低さと親が思うことを強制させる統制が高いような養育態度を持つ母親は，精神的不健康との関連があることが示唆された。そこで，次に精神的不健康に繋がるような母親の要因はどのようなものがあるのか検討することとした。

養育態度に関する研究

多くの研究で使用されてきたBaumrindによる養育態度について，親の子どもに対する要求や志向は人それぞれであると考えられ，応答性と統制の２次元で構成されると述べられている。応答性は，communicationやnurturanceの要素があり，responsiveなものである。統制は，

1　広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期
2　広島大学大学院人間社会科学研究科附属幼年教育研究施設

control や maturity demands の要素があり，demanding なものであると述べられている（Baumrind, 1967）。これに対して，前述の研究を引用した中道・中澤（2003）では，応答性について，母親と子どものコミュニケーションと養育から成り，「子どもの意図・欲求に気づき，愛情のある言語や身体的表現を用いて，子どもの意図をできる限り充足させようとする行動」と述べている。また，統制について，養育上の統制と母親の成熟要求から成り，「子どもの意志とは関係なく，母親が子どもにとって良いと思う行動を決定し，それを強制する行動」と述べている。そして，応答性や統制の高低によって養育態度を参加者ごとに分類して研究が行われてきた（Baumrind, 1967; Baumrind, 1971）。Baumrind（1967）では，養育態度を応答性や統制の高低によって３つのタイプに分類している。１つ目に，権威的態度（Authoritative）という養育態度があり，応答性と統制の両方が高い養育態度である。２つ目に，権威主義的態度（Authoritarian）という養育態度があり，応答性は低く統制が高い養育態度である。３つ目に，許容的態度（permissive）という養育態度があり，応答性は高く統制が低い養育態度である。さらに，Baumrind（2010）では，養育態度と子どもの適応の関連について研究されている。応答性と統制が高い権威的態度は，青年期の子どもの自立性，自尊心，学校の成績が良いことを表す認知能力，コミュニケーション能力との関連が高く，問題行動との関連が低いことが明らかになっている。応答性は低く統制が高い権威主義的態度は，青年期の子どもの自立性，自尊心，学校の成績が良いことを表す認知能力，コミュニケーション能力との関連が低く，問題行動との関連が高いことが明らかになっている。応答性が高く統制は低い許容的態度は，青年期の子どもの自立性，自尊心の低さと関連が見られた。以上のことから，権威的態度という養育態度が子どもにとって最も適応的であることが考えられている。

一方，Robinson et al.（1995）は，養育者をBaumrind の類型に基づいて分類するのみではなく，養育者の習慣としてしつけを捉えることも重要だと考えている。つまり，１つの養育態度に養育者を分類するというよりも，一人の中でどの種類の養育態度の傾向が強いかを測定する視点を与えている。さらに，Robinson et al.（1995）は，Baumrind の類型に基づいた養育態度の傾向を実験的に多くのサンプル数で測定する尺度を作成した。現在，日本語版も野嵜・中村・齋藤（2014）によって検討されている。Robinson et al.（1995）によると，養育態度を国際的に見られている３つの因子で捉えている。１つ目に Authoritative という養育態度であり，野嵜・中村・齋藤（2014）は指導的態度と命名している。温かさと関わり（warmth と involvement）・論理的に導くこと（reasoning と induction）・民主的に子どもが家庭に参加すること（democratic participation）・優しさや寛大さ（good natured と easy going）の下位因子によって構成された（Robinson et al., 1995）。２つ目に Authoritarian であり，野嵜・中村・齋藤（2014）は権威主義的態度と命名している。言葉による敵意（verbal hostility）・身体的な罰（corporal punishment）・非論理的であり懲罰的なしつけ（non – reasoning と punitive strategies）・子どもの進む方向を示す（directiveness）という下位因子によって構成された（Robinson et al., 1995）。３つ目に permissive であり，野嵜・中村・齋藤（2014）は放任的態度と命名している。言動に一貫性がない（lack of follow through）・問題行動を無視する（ignoring misbehavior）・子育てに対する自信のなさ（self-confidence）の下位因子によって構成された（Robinson et al., 1995）。

子どもの行動に対する母親の帰属に関する研究

養育態度に影響を与える要因として，本研究は子どもの行動に対する母親の帰属と感情に着目した。子どもの行動に対する親の帰属については，以下のものが先行研究で挙げられている。田川（2020）は，身体的虐待リスクを高めるメカニズムの中で，特に，親の認知的リスク要因に着目して文献検討を行っている。その文献レビューによると，先行研究から，親が子どもの行動に対して抱く原因帰属には，主に原因の所在（子どもの内的要因か，外的・状況要因か），安定性（持続的要因か一時的要因か），統制可能性（子どもにコントロールできる要因か否か）などの次元があると述べられている。また，近年の親の帰属研究ではこれらに加え責任帰属が注目されていることを取り上げている。責任帰属とは，子どもの行動を正当化する理由や根拠がどの程度あると考えるかであり，自発性，意図性に加え，意図がネガティブなものかどうか（利己的，敵意など），行動の結果を予測できていたか，行動の道徳的な意味を理解できていたか，などの次元があると述べられている。原因

帰属では原因の特徴を表す一方で，責任帰属は人に関する評価を示す（Jacobs, Woolfson, & Hunter, 2017）。責任帰属と不適切な養育の関連を検討したJacobs, Woolfson, & Hunter（2017）によると，子どもがわざとその行動をしたと帰属する意図性帰属と不適切な養育に関連が見られた。また，問題行動を子どもに責任があると捉える子どもの責任帰属と不適切な養育に関連が見られた。さらに，親が子どもの行動をコントロール可能であると考え（親の対処可能性帰属），子どもにはコントロールが難しいと考えること（子どもの統制可能性）と不適切な養育に関連が見られた。ここで，原因帰属や敵意帰属などを扱った中谷（2016）では，「頭をたたく，大声で叱る」などの不適切な養育がどのように生じるのかについて，子どもの行動に対する母親の帰属→感情→行動のプロセスを検証した。その結果，親の対処可能性が低いほど，また，問題行動の安定性が高いほど，怒り・嫌悪感情が強まり，怒り・嫌悪感情が強いほど，不適切な養育が高まることが明らかにされた。つまり，不適切な養育に影響を与える帰属の内容と，帰属が怒り・嫌悪というネガティブな感情を通して不適切な養育に影響を与えることが示唆された。

すなわち，子どもの行動に対する親の帰属は，感情を媒介して養育態度に影響を与えることが考えられる。本研究の目的は，親の帰属と養育態度の関連に及ぼす感情の媒介効果を検討することとした。先行研究（Baumrind, 1967）では，養育態度は応答性と統制の２次元の高低から３つのタイプに分類され，本人の特質として捉えられていた。また，これまでは不適切な養育行動が攻撃的なものや過保護なものなど単体で扱われていた（中谷，2016；Crouch et al., 2017; Milner, 2019）。本研究ではRobinson et al.（1995）を参考に，養育態度を様々な側面で捉え，一人の中に様々な養育態度の傾向は有しているが，最も多く使用するものとしてのしつけを養育者の習慣と捉えている。また，養育態度を日本語で量的に調査できる野嵜・中村・齋藤（2014）の尺度を使用することによって，養育態度に与える影響を多くのサンプル数で検討することが可能となる。そのため，本研究から親子にとって適応的な養育態度と不適応的な養育態度について，影響を与える要因などを理解することができると考えられる。

仮説は以下の通りである。中谷（2016）とJacobs, Woolfson, & Hunter（2017）の結果から，安定性帰属・行動の意図性帰属・子どもの責任帰属が敵意感情に正の影響を与え，敵意感情が生起されることで身体的にも言語的にも厳しい権威主義的態度に繋がると考えられる。また，親の対処可能性が敵意感情に負の影響を与え，敵意感情が下がると権威主義的態度の傾向も低減することが考えられる。

方　法

参加者　クラウドソーシングサービス「クラウドワークス」に登録している２～６歳児を持つ200名がGoogleフォームのアンケートに回答した。母親の平均年齢は35. 89歳で，SD = 5.23であった。母親の就業形態は，フルタイム31名（17.4％），パートタイム41名（23.0％），専業主婦96名（54.0％），自営業４名（2.2％），休職中などその他６名（3.3％）であった。回答した参加者のうち，ダミー項目に誤答している人や設定した場面について，「全く経験したことがない」と回答した人のデータは扱わないこととした。有効回答数は178名であり，有効回答率は89％であった。

調査時期　クラウドソーシングサービス「クラウドワークス」上にて，2021年10月16日～20日に回答者の募集を行い，調査を行った。

手続き　クラウドソーシングサービス「クラウドワークス」にGoogleフォームで作成したアンケートのURLを掲載し，参加者を募集した。参加者は自宅にて回答を行い，筆者に回答を送信して終了となった。その後，クラウドワークスを通して，謝礼金を支払った。

質問紙内容

①属性

母親の年齢，就業形態，学歴，家族構成，子どもの人数，子どもの年齢と性別，子どもが通っている施設を尋ねた。

②養育者の認知

中谷（2016）を参考に，まず，子どもの行動「困難場面」を２つ提示し，日常の子育て場面でどの程度経験しているか，頻度についていつも経験する（５点）～全く経験したことがない（１点）の５件法で尋ねた。提示した２場面について，「全く経験したことがない」と回答した参加者にはその後の質問項目は表記されず，Googleフォームが終了する運びとなっていた。「全く経験したことがない」と回答した参加者以外に，その後の認知や子どもに対する感情について尋ねた。子どもの困った行動に対する認

知の項目に関しては，中谷（2016）と Jacobs, Woolfson, & Hunter（2017）を参考に作成した。「子どもの統制可能性」「子どもの内的要因」「安定性」「子どもの責任」「意図性」「親の対処可能性」の６つの因子で構成された。「このような行動は，子どもが自分でコントロールできるものだと思いますか」など，提示場面を想起した際に浮かんでくる考えについて，とてもそう思う（５点）～全くそう思わない（１点）の５件法で尋ねた。中谷（2016）より，帰属の評価は，結果に対する帰属を１項目によって評価する方法が一般的であると述べられていたこと，Jacobs, Woolfson, & Hunter（2017）の研究でも，１つの因子に対して１項目によって尋ねられていたため，６項目で作成した。

③子どもに対する親の感情

上記の場面を提示し，その時に抱く気持ちについて，とてもそう思う（５点）～全くそう思わない（１点）の５件法で尋ねた。寺崎･岸本･古賀（1992）の感情状態に関する尺度から「親和」「抑うつ・不安」「敵意」「驚き」因子を因子負荷量の大きい順に，また，子どもに対する親の感情を表す言葉として適切であると考えられるものを３つずつ抽出した。「いとおしい」「悩んでいる」「敵意がある」「びっくりした」など，全12項目で構成された。

④養育態度

養育態度は Robinson et al.（1995）を参考に，日本語版を作成している野嵜･中村･齋藤（2014）の尺度をすべて使用した。普段の子どもへの接し方について，いつもそうする（５点）～全くそうしない（１点）の５件法で尋ねた。「指導的態度」「権威主義的態度」「放任的態度」の３因子であり，「私は子どもに，何か困ったことがあれば話すように促す」「私は，子どもがよくないことをしたときは子どもをひっぱたく」「私は，子どものよくない行動にどう対処してよいか自信がないように見えると思う」など，62項目で構成された。

倫理的配慮　参加者への倫理的配慮として，調査協力への任意性を確保するため，回答の途中であっても回答をやめたくなった場合はいつでもやめることが出来ること，途中で回答をやめた場合でも参加者の不利益にはならないことを記載した。また，統計処理については，個人が特定されることはないことを記載した。前述の記載を読み，回答上の注意に同意する参加者は「同意する」をクリックすると，Google フォームの回答ページを進められる仕組みとした。「同意しない」をクリックすると，その時点で回答が終了となる。万一回答者に苦痛を与えてしまった場合の苦情・相談窓口として，調査実施者の名前・連絡先（メールアドレス）と，指導教員の名前・連絡先（メールアドレス）を記載した。さらに，アンケートの最終項目に感想などが自由に入力できる欄を設けた。研究者は前述の項目も確認し，回答者がどのような心的状態になったか把握できる体制を整えた。

結　果

子どもの行動に対する帰属の尺度は，先行研究により１項目につき１因子を表した。子どもに対する親の感情は，探索的因子分析を行った結果，因子負荷量に対して不適切な解が出力された項目７を削除した。また，原版では驚きという因子に含まれていた「おろおろした」という項目が，本研究では抑うつ・不安感情に分類された。養育態度に関しては，確認的因子分析を行い，原版通りの３つの因子に分類した。以上の因子を用いて，相関分析を行い，その結果を元に，子どもの行動に対する帰属を独立変数，子どもに対する感情を媒介変数，養育態度を従属変数として媒介分析を行った。

①子どもの責任から権威主義的態度への影響について　敵意感情を媒介変数として投入した媒介分析の結果，子どもの責任から権威主義的態度への直接効果が見られたが（β=.24, p<.01），媒介変数として敵意感情を投入すると効果がなくなった（β=.06, *ns*）。このことから，子どもの責任帰属は敵意感情に影響を与え（β=.45, p<.01），敵意感情を媒介することで権威主義的態度に影響を与えることが示唆された（β=.40, p<.01）。さらに，ブーストラップ法（サンプリング回数：2000，信頼区間：95％）により間接効果を検定した結果，有意であった（β=.18, CI[.04, .09]）。従って，完全媒介が成り立っているという結果が得られた。

②子どもの責任から放任的態度への影響について　抑うつ・不安感情を媒介変数として投入した媒介分析の結果，子どもの責任から放任的態度への直接効果が見られたが（β=.15, p<.05），媒介変数として抑うつ・不安感情を投入すると効果がなくなった（β=.03, *ns*）。このことから，子どもの責任帰属は抑うつ・不安感情に影響を与え（β=.32, p<.01），抑うつ・不安感情を媒介することで放任的態度に影響を与えることが示

唆された（β=.39, p<.01）。さらに，ブーストラップ法（サンプリング回数：2000，信頼区間：95％）により間接効果を検定した結果，有意であった（β=.12, CI[.02, .05]）。従って，完全媒介が成り立っているという結果が得られた。

③子どもの責任から放任的態度への影響について　敵意感情を媒介変数として投入した媒介分析の結果，子どもの責任から放任的態度への直接効果が見られたが（β=.15, p<.05），媒介変数として敵意感情を投入すると効果がなくなった（β=.05, *ns*）。このことから，子どもの責任帰属は敵意感情に影響を与え（β=.45, p<.01），敵意感情を媒介することで放任的態度に影響を与えることが示唆された（β=.20, p<.01）。さらに，ブーストラップ法（サンプリング回数：2000，信頼区間：95％）により間接効果を検定した結果，有意であった（β=.12, CI[.03, .08]）。従って，完全媒介が成り立っているという結果が得られた。

考　察

本研究の目的は，親の帰属と養育態度の関連に及ぼす感情の媒介効果を検討することであった。

子どもの責任から権威主義的態度への影響について敵意感情の媒介効果

子どもの困った行動に対する親の認知である子どもの責任帰属が養育態度の権威主義的態度に及ぼす影響について，敵意感情に完全媒介の効果が見られ，仮説が支持された。つまり，子どもの責任帰属の効果のみで子どもに対して権威主義的な養育態度になるのではなく，子どもの行動に対して子どもの責任であると認識して敵意感情が生起されることで権威主義的な養育態度に繋がることが示唆された。子どもの困った行動を子どもの責任であると帰属することは，居心地の悪い感情を相手に向ける敵意感情に繋がると考えられる。そして，敵意感情を抱くと，そのストレスを発散させたいという思いや相手をコントロールしたいという気持ちに繋がり，正当な理由なく親の要求やしつけを子どもに押し付ける権威主義的態度に繋がることが考えられる。これは，子どもの責任帰属と不適切な養育に関連が見られた Jacobs, Woolfson, & Hunter（2017）の研究結果と一致する。

子どもの責任から放任的態度への影響について抑うつ・不安感情の媒介効果

子どもの困った行動に対する親の認知である子どもの責任帰属が養育態度の放任的態度に及ぼす影響について，抑うつ・不安感情に完全媒介の効果が見られ，仮説とは異なる結果が示さ

Table 1　各尺度の基礎統計量

子どもの行動に対する帰属	α係数	平均値	標準偏差
子どもの統制可能性	.	5.66	1.99
子どもの内的要因	.	6.40	1.96
安定性	.	3.84	1.77
子どもの責任	.	5.04	1.71
意図性	.	4.94	2.06
親の対処可能性	.	6.22	1.67
子どもに対する親の感情			
親和	.83	4.47	1.89
抑うつ・不安	.85	5.82	1.85
敵意	.80	4.73	1.81
驚き	.71	4.09	1.76
養育態度			
指導的態度	.90	3.99	.43
権威主義的態度	.89	2.26	.54
放任的態度	.67	2.48	.42

※帰属は１項目で一変数を表しているため，α係数の算出不可

Table 2　各尺度得点の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1 子どもの統制可能性	1.00												
2 子どもの内的要因	.13^{+}	1.00											
3 安定性	.09	.31**	1.00										
4 子どもの責任	.32**	.26**	.31**	1.00									
5 意図性	.23**	.24**	.19*	.39**	1.00								
6 親の対処可能性	.52**	.02	-.01	.21**	.09	1.00							
7 抑うつ・不安感情	.09	.28**	.23**	.32**	.25**	-.01	1.00						
8 驚き感情	.26**	.15^{+}	.23**	.30**	.23**	.17*	.48**	1.00					
9 敵意感情	.08	.16*	.30**	.45**	.31**	-.14^{+}	.39**	.37**	1.00				
10 親和感情	.18*	-.03	0.00	-.06	.07	.22**	-.09	.30**	-.34**	1.00			
11 指導的態度	-.07	-.03	-.24**	-.16*	-.13^{+}	.13^{+}	-.11	-.16*	-.32**	.14^{+}	1.00		
12 権威主義的態度	.11	.21**	.28**	.24**	.34**	-.07	.19*	.19**	.43**	-.12	-.17*	1.00	
13 放任的態度	.04	.12	.26**	.15*	.27**	-.19*	.40**	.17*	.42**	-.06	-.38**	.40**	1.00

$^{**}p$ < .01, $^{*}p$ < .05, ^{+}p < .10

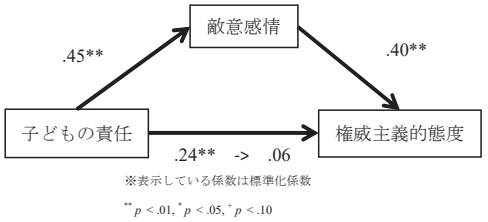

Figure 1　子どもの責任が敵意感情を媒介して権威主義的態度に与える影響

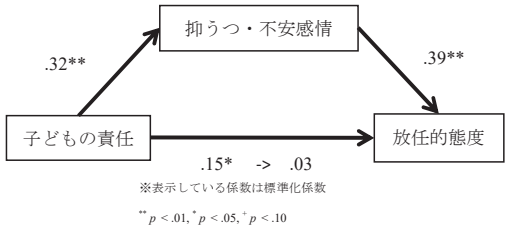

Figure 2　子どもの責任が抑うつ・不安感情を媒介して放任的態度に与える影響

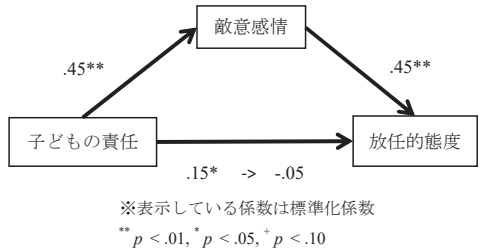

Figure 3　子どもの責任が敵意感情を媒介して放任的態度に与える影響

れた。つまり，子どもの責任帰属の効果のみで子どもに対して放任的な養育態度になるのではなく，子どもの行動に対して子どもに責任があると帰属して抑うつ・不安感情が生起されることで放任的な養育態度に繋がることが示唆された。これは，子どもの困った行動を子どもの責任と捉えることで，外的・状況的要因と捉えるよりも子どもの行動が適応的に変化する見通しが立たないことや，親のやるせなさからうつ・不安感情が生起または強まり，その抑うつ・不安感情によって子どもに向き合う力が弱まり子どもとの積極的な関わりが少ない放任的態度に繋がることが考えられる。実際に，母親の抑うつと子どものパーソナリティの発達の関連について，文献レビューを行い，将来の研究に対する示唆を与えた菅原（1997）は，抑うつ状態の母親の養育行動を観察すると子どもに対する応答性の鈍さやコミュニケーションの減退，動きのぎこちなさが複数の先行研究で見られたことを述べている。

子どもの責任から放任的態度への影響について敵意感情の媒介効果

子どもの困った行動に対する親の認知である子どもの責任帰属が養育態度の放任的態度に及ぼす影響について，敵意感情に完全媒介の効果が見られ，仮説とは異なる結果が示された。つまり，子どもの責任帰属の効果のみで子どもに対して放任的な養育態度になるのではなく，子どもの行動に対して子どもに責任があると帰属して敵意感情が生起されることで放任的な養育態度に繋がることが示唆された。これは，子どもの困った行動を子どもの責任と捉えることで，居心地の悪い感情を相手に向ける敵意感情に繋がると考えられる。そして，その敵意感情によって子どもに向き合う力が弱まり子どもとの積極的な関わりが少ない放任的態度に繋がることが考えられる。Jacobs, Woolfson, & Hunter（2017）の研究でも，不適切な養育尺度に permissive discipline の要素が含まれているため，前述の結果と一致する。抑うつ・不安感情を媒介する放任的態度に比べて，敵意感情を媒介した放任的態度は，子どもに向き合おうという感情がより少なく，子どもへの関わりを意図的あるいは無意識的に減らしている可能性が考えられる。

以上の本研究の結果から，子どもの行動に対する捉え方によって，感情や養育態度が変化することが明らかになった。このことから，育児を負担に感じている養育者や子どもに厳しく接してしまうあるいは回避的な対応になってしまう養育者に対して，自身の考え方が及ぼす影響やそのメカニズムを心理教育すること，認知を変容させる介入を行うことで養育者の精神的健康に寄与できるとともに子どもへの影響も適切なものになることが期待される。また，自身にとって育児が困難になっている養育者に対して，認知を変える介入を受けることは公共機関に定期的にサポートを受けに行くことよりも負担が少なく，子育て支援に役立つ可能性があると言える。

本研究の課題

第一に，子どもの行動に対する捉え方が感情を通して養育態度に影響を及ぼすメカニズムが明らかになった一方で，本研究では同じ帰属であってもうつ感情が生起される養育者と敵意感情が生起される養育者に分かれた。養育者の認知および養育態度に介入アプローチする上で，

異なる感情が生起される理由や要因などについて，さらなる解明が必要であると考えられる。第二に，本研究では，養育態度の尺度に関して国際的に使用されている Robinson et al.（1995）の尺度を用いた。しかし，先行研究同様に３因子に分かれなかった。同様の養育態度を表していると考えられる Baumrind の許容的態度では，応答性が高く統制が低い養育態度と定義されていた。しかし，Robinson et al.（1995）や野嵜・中村・齋藤（2014）の作成した尺度では，統制が低いことを表す項目が多く，先行研究の概念を適切に表現することができていない可能性が考えられる。２つの次元の高低の組み合わせによる概念を１つの因子として表現することにも限界がある可能性がある。さらに，統制が低い養育態度は，周囲から見れば適切に養育されていないと判断されやすく，統制が低い養育態度を取る養育者は少ないなどの文化的な特性がある可能性も考えられる。日本で使用するにあたっては，多くのデータを集めることや，他国と日本の養育態度の文化的差異を考慮して日本語版を作成するなどの再検討が必要であると考えられる。

引用文献

Carol E. Akai, Cathy L. Guttentag, Kathleen M. Baggett, & Christine C. Willard Noria (2008). Enhancing Parenting Practices of At – risk Mothers. *The Journal of Primary Prevention* **29**, (pp. 223-242)

Clyde C. Robinson, Barbara Mandleco, Susanne Olsen Roper & Craig H Hart (1995). Authoritative, Authoritarian, and Permissive Parenting Practices: Development of a New Measure. *Psychological Reports*, **77**, (pp. 819-830)

Crouch J. L., Irwin L. M., Milner J. S., & Skowronski J. J. (2017). Do hostile attributions and negative affect explain the association between authoritarian beliefs and harsh parenting? Child Abuse & Neglect **67**, (pp. 13-21)

Diana Baumrind (1967). Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs* **75**, (pp. 43-88)

Diana Baumrind (1971). Current Patterns of Parental Authority. *Developmental Psychology Monograph* **4**, (pp. 1-103)

Diana Baumrind., Robert E. Larzelere., & Elizabeth B. Owens. (2010). Effects of Preschool Parents' Power Assertive Patterns and Practices on Adolescent Development. *Parenting: Science and Practice* **10**, (pp. 157-201)

厚生労働省（2019）．児童虐待防止対策の抜本的強化について　https://www.mhlw.go.jp/content/000496811.pdf

Milner, J. S., Wagner M. F., Crouch J. L., & McCarthy R. J. (2019). Child – related attributions of hostile intent and harsh discipline: Moderating effects of anger. *Aggressive Behavior* **45**, (pp. 610-621)

森岡 まどか（2020）．ソーシャルサポートが養育態度に及ぼす影響－育児感情を媒介要因として－広島大学教育学部卒業論文（未公刊）

Myrthe Jacobs, Lisa Marks Woolfson, & Simon C. Hunter (2017). Parental Attributions of Control for Child Behaviour and Their Relation to Discipline Practices in Parents of Children with and Without Developmental Delays. *Journal of Child and Family Studies* **26**, (pp. 1713-1722)

中道 圭人・中澤 潤（2003）．父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連　千葉大学教育学部研究紀要　第51巻（pp. 173-179）

中谷 奈美子（2016）．子どもの行動に対する母親の帰属と不適切な養育－感情を媒介として－　心理学研究　第87巻（pp. 40-49）

野嵜 茉莉・中村 沙樹・齋藤 慈子（2014）．日本語版養育スタイル尺度の作成と信頼性・妥当性の検討　日本心理学会第78回大会

菅原 ますみ（1997）．養育者の精神的健康と子どものパーソナリティの発達－母親の抑うつに関して　性格心理学研究　第５巻（pp. 38-55）

田川 薫（2020）．自閉スペクトラム症児の特徴が身体的虐待リスクを高めるメカニズム：親の認知的リスク要因に着目した文献検討　発達心理学研究　第31巻（pp. 141-159）

寺崎 正治・岸本 陽一・古賀 愛人（1992）．多面的感情状態尺度の作成　心理学研究　第62巻（pp. 350-356）